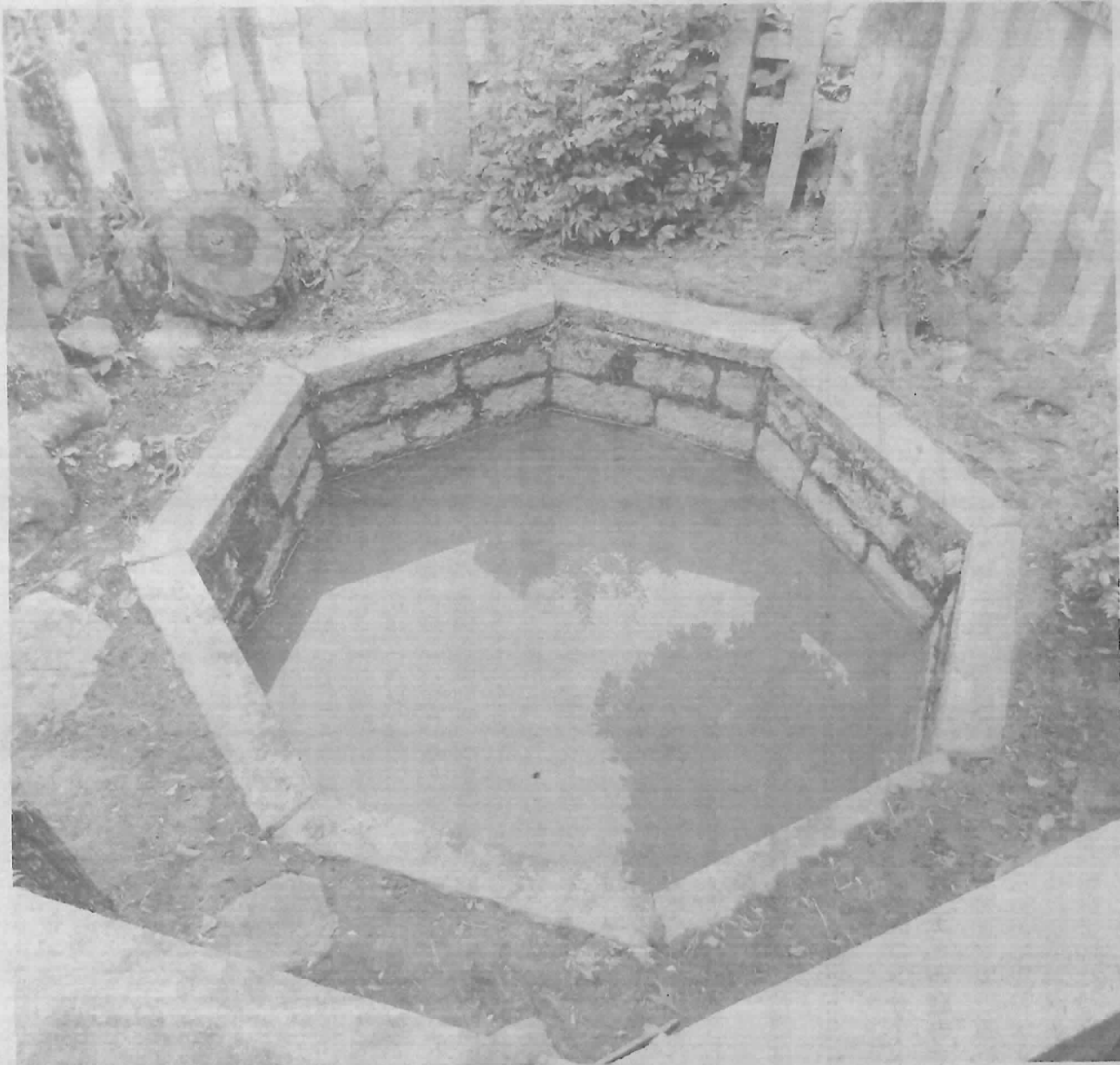


歴史のアンクル

鏡池

「真宗大谷派岡崎別院」



「鏡池」は井戸ほどの大きさ。地下水が豊富な土地柄で、生活用水をくんでいたと考えられる

流罪に遭い越後へ旅立つ前 親鸞聖人がその身を映した

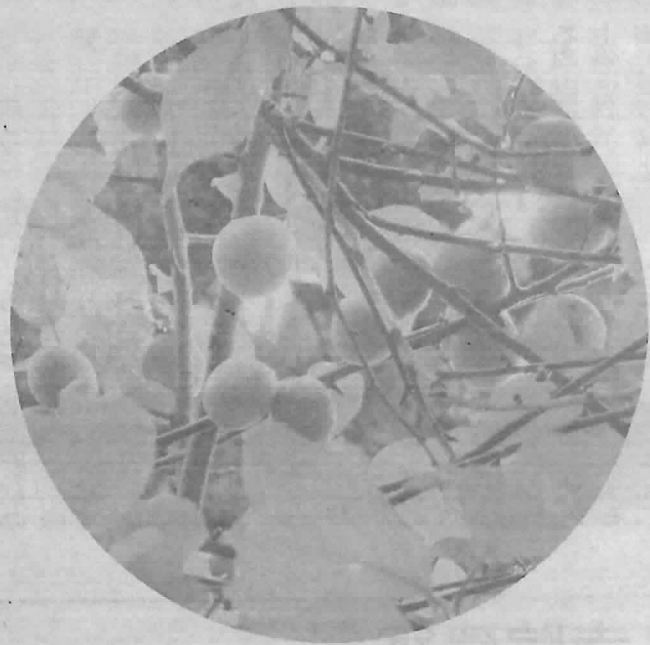
若き日の親鸞聖人が草人が承元の法難の折、越後へ旅立つ前にその身を映して名残を惜しんだ史蹟の岡崎別院（京都市左京区）には、35歳の聖「鏡池」がある。

29歳で比叡山を下りたから帰洛した63歳の、の大道を歩み始めた青春の地であり、また京都で6年間吉水の法然上人の同じ地の草庵だった。この後半生を再出発した場もとに通った。また関東こは聖人にとって、本願所でもあった。

草庵跡は教学道場として歩む



本堂は、江戸後期の創建当時のもの。重層の屋根は「道場づくり」と呼ばれる。昨年は宗祖親鸞聖人750回御遠忌に当たり、年間7500人が参拝した



「鏡池」の横にある「八房の梅」。初代は親鸞聖人のお手植えとされる。2年前から実をジュースに（5割余りほどしか作れないが）参拝者に振る舞っている（写真はおとし初夏に撮影・岡崎別院提供）

岡崎の草庵跡が再興されたのは享和元（1801）年。東本願寺第20代達如上人が門徒衆と兵に「岡崎御坊」を創建し、問所・清池館が開設された。明治になり「岡崎別院」と改称し、新門の学問所・清池館が開設された。明治になり「岡崎別院」と改称し、新門の学問所・清池館が開設された。

新門時代の句仏上人が学んだ。その後、金子大樂氏に学ぶ学習会・鏡池会が結成されるなど、教学研究の道場として歴史を刻んできた。今も境内に、大谷専修学院岡崎学舎がある。

同別院を訪れる人の中には、「ここに本当に親鸞聖人がおられたのですか？」と尋ねる人もいます。その実証は難しいが、地理的には比叡山から吉水に通う聖人の草庵があったとしても不思議ではない。そして岡崎御坊以前から、他のどの地でもなく同跡地が「親鸞屋敷」と呼ばれてきた。史実とされるのは、親鸞聖人が29歳から法然上人のもとに通ったこと。

「その6年間が聖人の生涯を貫いた。法然上人と親鸞聖人の出遇いは、ただ人と人が出会っただけではなく、深く本願によって出遇われた。この場に聖人がおられたかどうかがという由緒よりも、その方が大事。この別院はそれをもう一度、わが身に問い直すためにある」と、岡崎別院の福田大輪番は話す。

「鏡池」は、かつて流罪に遭いながらも、本願に生きることを決意する親鸞聖人の姿を映したのかもしれない。同別院は、これからも参拝する人が、自らの信心を確かめる道場としての「鏡池」であり続けるのだ。

（萩原典吉）